

多様に「こころ」探る

京大こころの未来研究センターが設立10周年を迎え、記念のシンポジウムが京都市左京区の京大百周年時計台記念館で開かれた。脳神経科学、文化心理学、さらには古文書研究。学際性を重視し、多様な角度から「こころ」にアプローチするセンターの理念が、登壇した3人の若手研究者の発表から浮かび上がった。

京大こころの未来研究センター設立10周年記念シンポ

■「こころ」のメカニズム

脳研究が専門の阿部修士准教授は、人が「ウソをつく」「ズルをする」際の脳のメカニズムに迫る。コイントスで裏表の予想が当たれば報酬を与える課題。ズルができるように「自己申告制」とすると、正解率が高い(ウソをついている可能性が高い)人ほど、金銭報酬への期待に関わる脳中央の「側坐核」の活動が活発だったという。さらに、「正直者」は、行動制御に関わる「前頭前野」をそれほど働かせずに答えているのに対し、「うそつき」が正直に申告する際は、前頭前野を活発に働かせることも分かった。阿部准教授は「正直さは自然な行為として発現するという孟子の『性善説』と、正直に振る舞うためには意思の



内田 由紀子氏

脳を知り「人間観」先取り 阿部准教授

農村のゆるい協調性 再考 内田准教授

現代まで変わらぬ基層注目 熊谷准教授

力が必要とする荀子の『性悪説』は対立的に論じられるが、報酬への期待という要素に着目すれば、統合的に解釈できる」と説明。人文科学の蓄積を生かしながら「脳を知ることで、変遷する『人間観』を先取りできるのでは」と、今後の展望を語った。

■「幸福観」の比較研究

内田由紀子准教授は、感情や意思決定というミクロな「こころの動き」と、自然や社会制度といったマクロな「環境」との相互関係に関心を寄せ、サンプリング調査やフィールド研究を進めている。

例えば「幸福観」について、北米では「うきうき」した感情が重視されるのに対し、日本では「おだかやさ」が大切にされる。北米の「良いことがさらなる幸福を招く」という「獲得系」に対し、日本は「良いことと悪いことのバランス、周囲の幸せも重視する」という「協調系」。つまり、日本では誰と一緒にいるか、どんな文化状況に置かれているかによって、心の働きや主体的な判断が変わるとの見方だ。

ところが、こうした相互協調的な主体性のあり方は、グローバル化の進展に伴う競争主義、評価主義によって、危機を迎えているという。そこで内田准教授は、主体性の「アンカー(よりどころ)」が重要になる」と説き、相互協調性のルーツとしての農村社会に目を向け、そこに息づく「ゆるいつながり」に可能性を見いだす。

■古代の心を知る

古文書解析を通して現代人の心の基層を探る熊谷誠慈准教授は、仏教を「近代以前のグローバルな哲学・心理学」と捉え、その時代的な変遷と空間的な相違に注目して研究を進める。

まず文献学によってどのようなことが分かるかについて、「敦煌文書」の解読を例示した。チベットでの「生け贄」の風習は、心の安定

につながるとされていたが、仏教が伝わった7世紀以降、ネガティブな「悪習」へと変わっていった。このように、心の概念の誕生や、その変化、あるいは異国からの受容の過程などについて調べることができる。そして熊谷教授は、古代の心を知ることが現代社会にも役立つと考える。3千年前から今に至るまで変わっていない「こころ

の層」は、簡単には変化しないと予測できる。一方、数十年のスパンで変容した心は、今後変わっていくだろう、と。さらに、東アジアの政治的・イデオロギー的な争いも、いったん「同じ宗教文化を持つ『こころ観』にさかのぼって対話すれば、対立を乗り越える糸口になるのではないか」と語った。

(阿部秀俊)



阿部 修士氏



熊谷 誠慈氏